

《地場産品・ブランド化》

にほんまつし
福島県二本松市「ゆうきの里づくり」



にほんまつし 福島県二本松市「ゆうきの里づくり」

地域資源循環のふるさとづくり

有機農業、有機的な人間関係、挑戦する勇気の3つの
“ゆうき”による、里山の恵みと人の輝くふるさとづくり

阿武隈の山すその国道沿いにある道の駅「ふくしま東和あぶくま館」は、一見どこにでもある施設のように見える。しかし、店舗に足を一步踏み入れるとすぐに違いが分かる。元気のよい挨拶と共に、誇らしげに「東和げんき野菜」のシールが貼られた多種多様な新鮮野菜が目飛び込んで来る。地元産の桑等の加工品も所狭しと並び、いわゆる全国ブランドの商品は一つも売られていない。「大事に育てたふるさとの野菜をどうぞ」のメッセージがまっすぐに心に響いて来る。



桑畑と沢田、棚田の稲穂を赤とんぼが舞う日

本のふるさとの原風景が今も残る福島県二本松市の東和地域(旧東和町)ではじまった「ゆうきの里東和」の取り組みは、「ひとの健康」から「土の健康」、「地球の健康」へと視野を広げ、取り組みは年々厚みを増してきている。決して、恵まれた条件にあるとはいえない東和の人々が着目したものは？そして、それをどう活かしてきたのか？

取り組み概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

取り組みの目的

阿武隈山系東和地域の自然豊かな里山の恵み、歴史と文化・景観を保全し、地域資源循環のふるさとづくりを推進し、顔と心に見える交流を通じて、誇りと生きがいを持って、住民福祉と健康増進を図り、住民主体の活性化を目的とする。

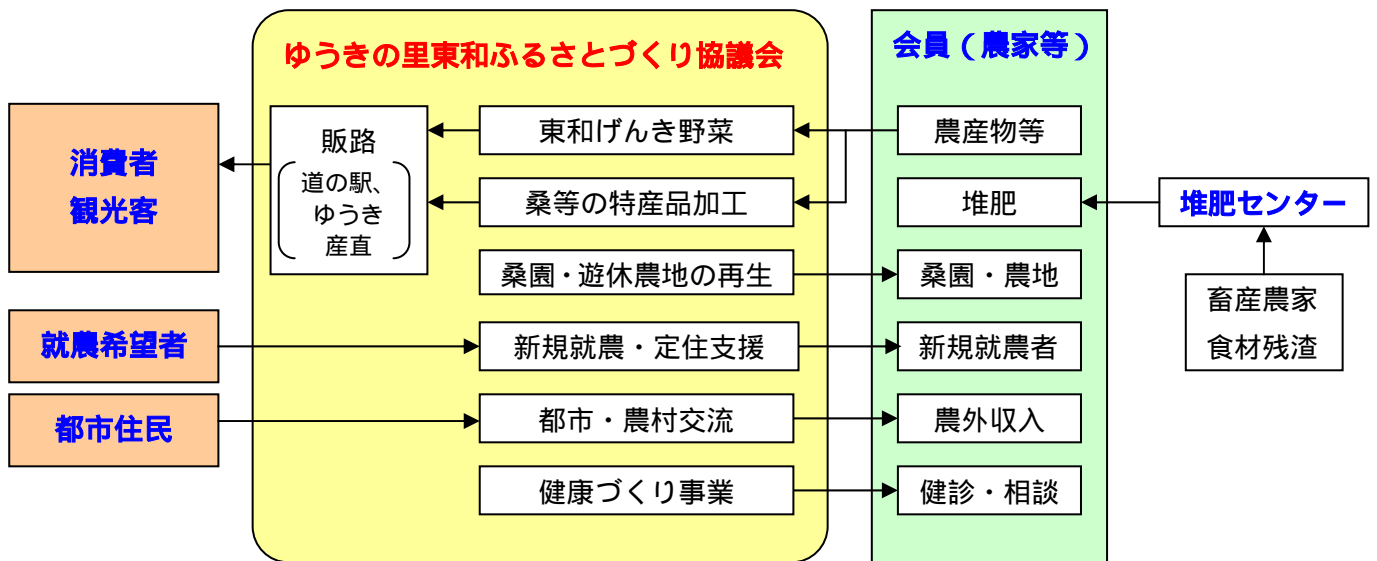
取り組みの内容

- ・特産品加工推進事業（桑・いちじく・りんご等加工品ほか）
- ・展示販売事業（道の駅「ふくしま東和」）
- ・店舗出店事業（市街地大型店・東京各区区民祭り等）
- ・食材産直事業（学校給食・宿泊施設）
- ・堆肥センター・営農支援事業（ゆうき産直、東和げんき野菜）
- ・交流定住促進事業（福島県ふるさと暮らし案内人ほか）
- ・生きがい文化事業（民話茶屋、しめ飾り・竹細工・陶芸等）
- ・健康づくり事業（健康講演会・健康相談会ほか）

取り組み主体

- ・特定非営利活動法人 ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会

取り組み体制



取り組みのポイント

1. 「ゆうきの里東和」宣言による地域再生の方向性を明確化

「ゆうきの里東和」宣言によって、ふるさとづくりの方向性を明確化することにより、挑戦する気持ち（勇気）を高めるとともに、6つの委員会が様々な事業を展開しつつも、上手く相乗効果が発揮されることにつながっている。

2. 東和に“あるもの”にこだわり、独自性を生み出す

「少量多品種」、「桑畑」、「有機農業」等、東和に“あるもの”に着目し、それに磨きをかけることで独自性を生み出している。“こだわり”を評価する都会の消費者との直接交流を重視し、ファンの獲得を目指している。このような地域に惹かれて、東和に移住して新たに農業をはじめめる若者がみられるようになっている。

3. 「6つの委員会」方式による全員参加型でのまちづくりの推進

6つの委員会が様々な活動を企画・実施しており、若者や女性、高齢者等、多様な人材が役割を発揮し、多様な事業を同時平行で進める推進力を得ている。また、地域において有機的な人間関係を築く基礎ともなっている。

取り組みによる成果

- ・道の駅の来店者数、売上の増加と返品率の低下
- ・「東和げんき野菜」の商品化と販路の拡大
- ・桑加工事業やゆうき産直事業の拡大
- ・雇用の創出
- ・耕作放棄地の再生
- ・新規定住者の受け入れ

今後の展望

- ・里山再生プロジェクト5ヵ年計画の実施
- ・東和げんき野菜の生産者の拡大
- ・収益事業（桑加工、ゆうき産直等）の自立
- ・都市農村交流の基盤となる農家民宿の確保

二本松市の概況

阿武隈の山すそに広がる農村

二本松市は、福島県の中通り北部に位置し、福島市と郡山市との中間に位置する。花木の名所が多く、春は桜が咲き誇り、秋には日本最大の菊の祭典「二本松の菊人形」や「二本松のちょうちん祭り」で賑わいをみせる。

東和地域(旧東和町)は、2005年12月に二本松市、安達町、岩代町と合併し、人口6万人を超える新・二本松市の一部となった。阿武隈の山すそにある農村で、狭い谷に沿って集落と桑畑や棚田が点在し、ほとんど平坦な土地はない。

2010年10月1日現在の東和地域の人口は7,479人、世帯数は2,083世帯で、合併時から世帯数は約50世帯増加したものの、人口は約680人の減少となっている。

東和地域には古くから信仰文化が栄え、多くの文化遺産が残されている。地域の北部に位置する木幡山には、1200年を超す古社である隠津島神

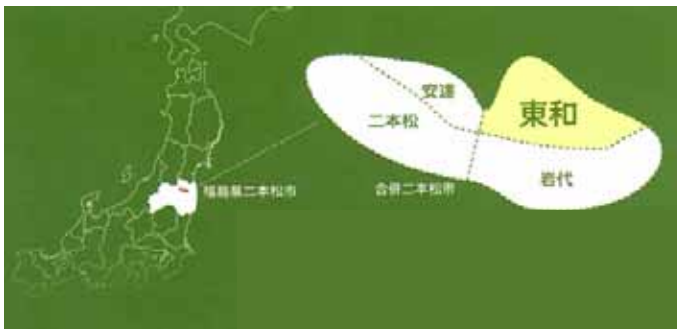
社や治陸寺等が点在している。国の重要無形民俗文化財の「木幡の幡祭り」は、前九年の役(1055年)の故事が伝承されたもので、950年の歴史と伝統を誇る「日本三大旗祭り」の一つとして知られている。色とりどりの五反旗が大空を翻る様子は、壮観で優雅そのものである。

スポーツが盛んなまち

東和地域は、スポーツが盛んなまちでもある。「東北のポストンマラソン」とも称される「東和ロードレース大会」は、市民手作りのマラソン大会であり、全国からの多くのランナーが訪れ、東和路を力走する。アップダウンが多い地域のため足腰が鍛えられ、箱根駅伝に出場するランナーも輩出している。

また、地域の西端を流れる阿武隈川ではカヌーも盛んである。国体でカヌー競技が開催されたり、中高生の全国大会が開催されている。2010年のアジア大会では、東和の出身者が銅メダルを取る等の活躍がみられた。

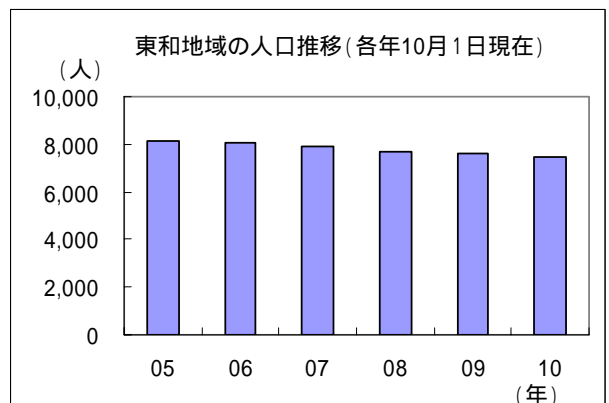
二本松市東和地域の位置



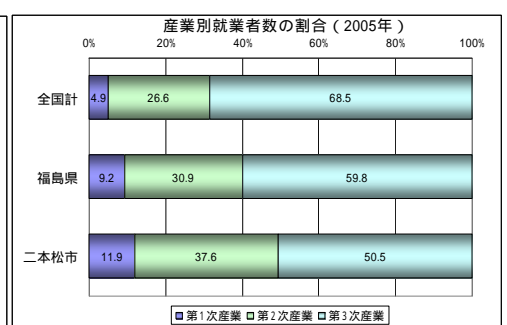
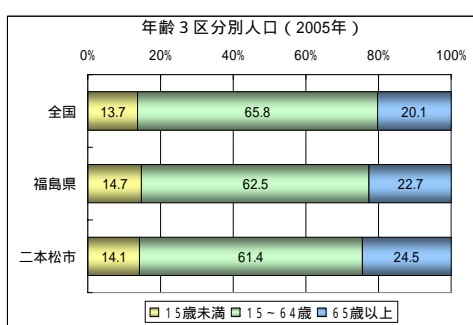
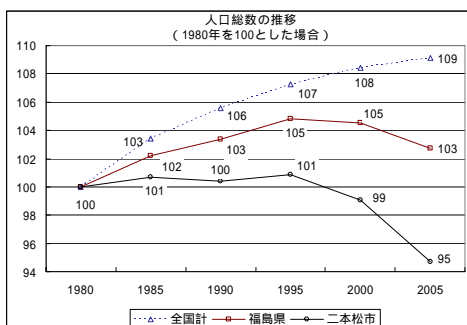
出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料

< 二本松市へのアクセス >

東京から 東京駅から新幹線・JR線で約2時間
 大阪から 伊丹空港から山形空港、バス、JR線で約4時間



出典) 二本松市資料



出典) 総務省統計局: 国勢調査

かつては国内屈指の養蚕地帯だったが、遊休桑園が拡大

東和地域は、かつては県内屈指の養蚕地帯であった。ピーク時（1970年代）の最盛期には、年間13億円の生産額を誇り、たくさんの農家が養蚕をしていた。しかし、生糸の輸入に押され、その後の約30年間で生産額は年3,000万円にまで激減。そのため、遊休桑園が増えていった。

現在は、地域の気候や風土を生かした有機野菜やコメが農業生産の中心となっている。

取り組みに至る経緯

合併で危機感をもった有志が立ち上がる

過疎化が進みつつあった東和地域では、以前から有機農業や特産品づくり等、様々なグループが活動していた。そのような折、2003年頃から、旧東和町と、二本松市等との合併協議が始まった。

合併すると、旧東和町は新市の周辺地域となってしまうことから、「このままでは置いていかれるのでは！」という強い危機感を共有した地域の有志9名（後の協議会メンバー）らが、これからの地域の活性化の方向性について月に1回程度話し合うようになり、今日の取り組みに繋がる“ゆうきの里づくり”という方向性が徐々にできあがっていった。この方向性が生まれた背景には、東和地域がかつて養蚕地帯であり、蚕が食べる桑を育てていたため、殺虫剤である農薬を使う習慣がなかったことがある。このような地域特性もあって、大野達弘氏（理事長）や佐藤佐市氏（副理事長）らは、30年近く前から有機農業をしたいと考えていた。しかし、取り組むからには、点や線ではなく、東和のまち全体での面的な取り組みとして進めていきたいと考えていた。そこで、“ゆうきの里づくり”という方向性が固まってきた段階で、それまで個別に取り組んでいた各団体に「活動に繋がりを持たせ、相互に連携しよう」と呼びかけた。集まったのは、つどいあい（直売所

出荷者の会）、有機農業生産団体、東和町特産振興会、東和町桑葉生産組合、とうわグリーン遊学（グリーンツーリズムの勉強会）等の13団体である。

呼びかけに賛同したこれらの団体が結集し、2005年4月に「ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会」が発足。同年10月にはNPO法人の認証を受けた。会の名称の「ゆうき」には、有機農業、有機的な人間関係、そして地域を動かす勇氣の意味が込められている。

6つの委員会による多岐にわたる活動

同協議会は、設立当初200名の会員からスタートしたが、様々な事業の展開により、2010年には260人にまで増加している。

次ページの図のように6つの委員会を設置し、発足母体となった13団体のリーダーを含む20人近い理事が活動を引っ張っている。商品政策（戦略）委員会は、新商品の開発等、担当案件がある時だけ活動することとなっており、その他の5つの委員会は年間を通じて活動している。

活動にあたって、6つの委員会が相互に関連していることが特徴的である。健康や安全をテーマとして活動する「ひと・まち環境づくり委員会」から、生命や健康の視点からのこだわりや提案が数多く出され、「東和げんき野菜」や「出張健康相談」等の新たな活動を生み出している。「単なるもの売りの組織であればここまでは活性化しないだろう」と富樫隆二氏（道の駅店長）は語る。



道の駅「ふくしま東和」の環境整備活動の終了後の記念写真
年4回の活動にはおよそ100名の会員が集まる。

出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会



理事長 **大野達弘** 氏 (左)
 副理事長 **佐藤佐市** 氏 (中)
 事務局長 **村松義正** 氏 (右)



大野理事長
 野菜や原木しいたけを生産。以前から新規就農者の受け入れに積極的で、時には自宅に住み込みさせながら、何名もの実習生を育ててきた。

佐藤副理事長
 野菜や原木しいたけを生産。グループで原木しいたけを生産したり、みんなで協力して野菜のパイプハウスを立てたりした経験から、共同で取り組むことの楽しさを身体で感じる。

村松事務局長
 元農協の支店長。定年退職した頃に、大野理事長らに誘われて取り組みに参加。農業研修生の受け入れのため、住宅確保に県や市を駆けずりまわり、交渉する等、行動的。

「合併の危機が住民を動かしました」

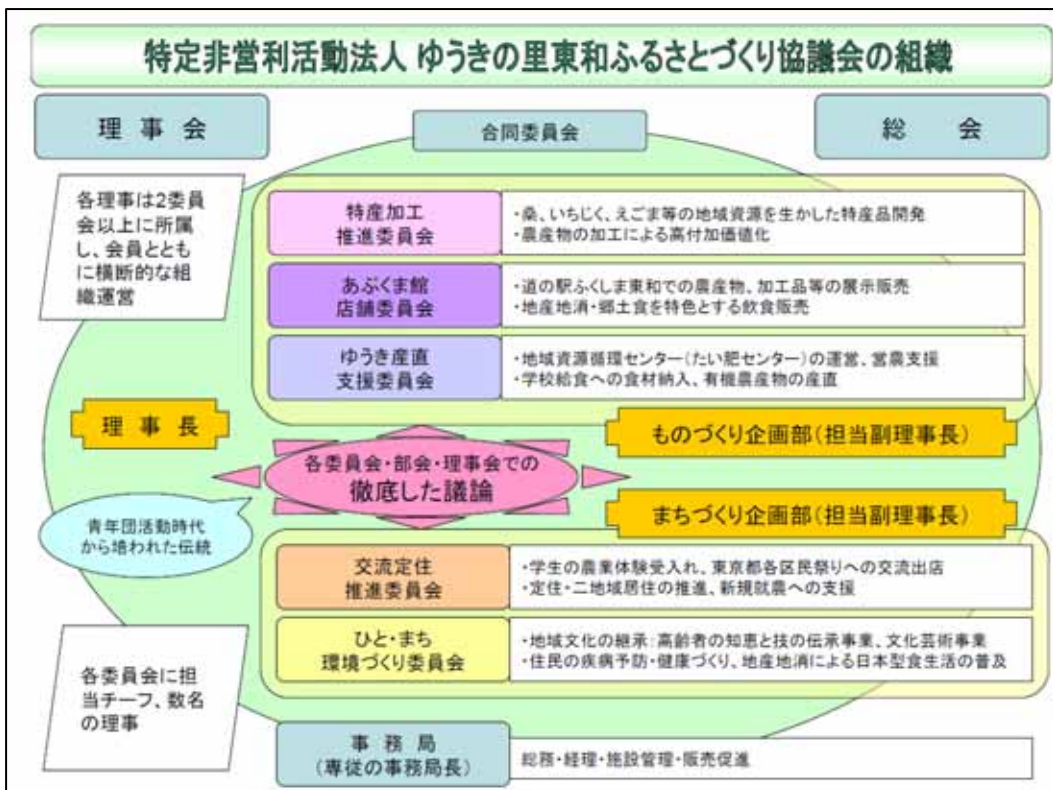
Q. 最初に集まった9名はどのような人たちだったのですか？
 有機農業やグリーン・ツーリズムに一生懸命に取り組む等、この地域を活性化するために必要な感性を持っていそうな人たちが集まりました。地域の中では多少うるさ型に見える人だったかもしれませんが。事務局的な役割を担っていただく方が必要であったため、当時定年退職されたばかりの村松さん(現事務局長)に参加していただきました。

Q. 13もの団体が結集するのは相当難しかったのではないですか？

確かにその通りです。合併の危機感があったからこそできたことだと思います。行政との距離が確実に遠くなるのが分かっていました。合併して5年が経過した今から立ち上がろうとしてもエネルギーが出るかどうか。ちょうどよいタイミングだったように思います。狭い地域の中で、別々に取り組むことで人集め等に苦労していた面もありました。そこで一つにまとまるうということになりました。

Q. 全員参加型の運営を生み出す秘訣は？

毎年の活動計画の策定にあたっては、各委員会から計画の素案を出してもらい、意見交換をしながら、内容を煮詰めて行くようにしています。特定の誰かが作成した案を承認するのではなく、きちんと話し合いながら、いろんな考えを取り入れて作って行くことで、関わる人たちの当事者意識が高まると考えています。夜の12時まで議論が白熱することもよくあります。



出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料

現在の取り組み

道の駅ふくしま東和あぶくま館の運営

旧東和町では、2000年に国の補助制度を活用して東和町活性化センター「道草の駅 あぶくま館」を設置した。道の駅の指定を受けたかったが、「24時間利用可能なトイレの設置」という基本要件を満たせなかったため、「道草の駅」としてスタートした。市の直営施設のため販売のプロはいない。直売コーナーに持ち込まれた農産物が売れ残ることも多々あり、その処分費の負担もかさんだという。その後、トイレを整備し、2004年に道の駅の認証を受けた。

道の駅「ふくしま東和」あぶくま館の施設構成は、「直売所」、「飲食店（2店）」、「商友会売店」、ジェラートショップ「NATURE（ナチュレ）」等の商業・飲食施設のほか、加工室、ガーデン体験室、会議室等の交流スペースがある。同施設では、有機野菜や特産品、堆肥を販売したり、健康講座が開催される等、協議会の各委員会の活動が連携し、相乗効果を生み出す拠点となっている。施設構成が多様であることや、周辺地域に観光資源が豊富にあることから、年間を通じて様々な人が道の駅を訪れる。売上のうち、観光客が占める割合は約5割で、観光シーズンには6～7割ともなる。

指定管理制度が導入されることとなり、公募を経て、2006年1月1日からNPO法人ゆうきの

里東和ふるさとづくり協議会が指定管理者となった。2006年から2008年までの3年間の指定管理期間が終わり、再度行われた事業者の公募の結果、2009年から2014年までの5年間、改めて指定管理者の指定を受けた。行政からは、単なる施設の維持管理だけではなく、地域づくりのコーディネーター的な役割を果たすことも期待されている。指定管理を受けるにあたって、同協議会では、以前からつきあいがあり、店長経験が豊富なコープ福島の富樫氏（現店長）を招くこととした。富樫氏が店長として着任した時は、店には活気がなく、商品の陳列も十分でなかったという。富樫店長は2006年4月に着任し、スタッフの指導に努めると共に、業務の繁閑に応じた短時間勤務のパートスタッフを増員する等、体制を強化した。また、道の駅の開店当初は総人員が限られていたため、カップアイスは製造されていたが、本格的ジェラート店は開店が先延べされていた。そこで、「地元素材」にこだわった手作りジェラートの開発を富樫店長が提案。スタッフの努力もあって12種類の新商品を生み出した。2007年6月に新開店したジェラートショップはマスコミにも取り上げられ、売上を伸ばしている。2009年5月に登場した「東和げんき野菜」（後述）はさらに売り場を活性化した。「品物が足りない」と嬉しい悲鳴を上げつつ、富樫店長の両手は休む暇もなく商品を陳列し続けている。



道の駅「ふくしま東和」あぶくま館の外観
12月に行われる「木幡の幡まつり」の旗がたなびいている。



道の駅店長

とがしりゅうじ
富樫隆二 氏



福島の生協の10店舗で店長を経験。個人の力を引き出すのが得意。スタッフの頑張りや、以前の店舗からは随分と変わりましたと嬉しそうに語る。最近、農業をはじめ。

「手を加え続けることで、売り場は良くなります」

Q. 最初に来られた時の印象はどうか？

以前は、お客さんが来店されても挨拶もなく、腕を組んで接客をしていました。商品もただ並べてあるだけで、売れ残りも多くありました。道の駅という不特定多数のお客さんを対象とする施設としては十分とはいえませんでした。

着任後、「これどうするの?」「こうしたほうがいいのでは」とスタッフに声をかけるだけで、売り場はみるみるうちに良くなっていきました。スタッフの潜在能力が上手く引き出せていなかったように思います。

Q. 売り場づくりで心がけていることは？

今は直売所間での競争も激しくなっています。売り場が狭いのでやりくりが難しいですが、お客さんの視点にたつて、すこしでも分かりやすい陳列、買い物がしやすい陳列を心がけています。同じ商品でも1日に何度も動かします。そうして商品に手をかけている姿は、生産者の心にも伝わると考えています。



出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料



ジェラートショップ
「NATURE(ナチュレ)」

桑、桑の実に加え、トマト、からし、焼き芋、きんぴら、ゆず、きゅうり、生姜蜂蜜、梅干など多彩な季節メニューが大好評。

出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料



直売所
新鮮野菜・果物のほか、桑関連製品、加工品等が並び、



桑の加工品コーナー
桑の機能性を説明するパネルや新聞記事等が店舗のあちこちに掲示されている。

「東和げんき野菜」

「ひと・まち環境づくり委員会」が農家（会員）を対象とする健康講座を続けているうちに、「食べるものが健康でないと健康になれない。食べるものの健康には土の健康が大切」という発想が芽生え、安全・安心な野菜づくりを考えるようになった。

当初は国・県等による有機栽培基準の導入も考えたが、高齢の農家には品目ごとの大量の資料作成は負担が重く、少量多品種の東和での導入は困難と考え、独自基準を考えることとした。そうして生まれたのが「東和げんき野菜5つのお約束」である。 土壌の検査、 有機質肥料の使用、 農薬の使用抑制、 栽培履歴の記録、 硝酸性イ

オン濃度の確認の5項目を満たしていれば「げんき野菜」のシール（農家が1枚1円で購入）を貼って出荷することができる。2009年5月から「東和げんき野菜」の出荷が始まった。初年度のシールの販売枚数は20万枚で、2010年度は30万枚に迫る勢いとなっている。道の駅の直売所だけでなく、福島市内のスーパー等の売り場でも夕方には売り切れて文句が出るくらい大変好評となっている。直売所の返品率も以前の15%から2%前後にまで低下し、「元気な作り手（高齢者）が増えた」と海老沢誠氏（企画担当）は語る。この取り組みから、「作り手（農家）の健康も大切」と認識が更に広がり、毎月、保健士を道の駅に招き、健康相談会を開催している。



東和げんき野菜の売り場（道の駅）
甘くておいしい葉物野菜や根菜、いも類、果物等、多様な農産物に、1枚1枚丁寧にシールが貼られている。



東和げんき野菜 5つのお約束
この基準を満たしていれば「げんき野菜」シールを貼れる。



堆肥センター
発酵した堆肥から湯気が出ている



道の駅で販売されている「げんき1号」(堆肥)



協議会職員(企画担当)

えびさわまこと
海老沢誠 氏



大阪からの1ターン。家電の設計やマーケティングの仕事で全国を飛び回りつつ、いつかは里山で暮らしたいと古民家に2007年10月に移住し、協議会の紹介を受ける。東和げんき野菜のプロモーションなど企画を担当。

「野菜を食べて、健康になってほしい」

Q. 取り組みにあたって不安だったことは？

当初は、1枚1円のシールをわざわざ買って、貼ってくれるのか、土の検査を受けてくれるのかと不安でした。しかし、「肥料を入れすぎですよ」、「野焼きはよくないですよ」などと土壌の分析結果を説明すると、関心を持っていただけるようになりました。実は、肥料を入れすぎることが、農作物の病気や害虫を招いていたのです。共感していただいた農家の口コミで協力農家が増えました。

Q. 特にこだわっていることを教えてください。

「根拠の分かる野菜にしよう」ということです。独自基準でも背景がなければいけません。県の安達農業普及所にはずいぶんと指導・助言をいただきました。また、「主婦の目線に立った銘柄にしよう」ということでシールの表示をわかりやすくすると共に、販売価格は据え置き、売り切ることをめざしました。

「野菜を食べてもらって、健康になってもらおう」というのが出発点ですから。



有限会社ファイン(堆肥センター)

しらどしろう
白土四郎 氏



日本一の野菜づくりには、日本一の土づくりが必要と、5年間の歳月をかけて堆肥づくりを研究。仲間の出資を受け会社を設立し、畜舎に隣接した土地に堆肥センターを整備した。

「最高の堆肥を作っています」

Q. どのような堆肥を作っているのですか？

普通の堆肥は、畜産農家が本業の合間に作るのが一般的です。最低限の手間隙しかかけられないため、十分なものではありません。私たちが作っているのは、野菜や果物等の用途に応じたオーダーメイドの堆肥です。ハウス用と露地用とでも成分を変えています。手間隙をかけることで最高の堆肥ができました。熟成した堆肥は臭いませぬ。東和地区での有機栽培や福島県の北部地域で使っていただいています。このような堆肥センターが全国各地にあればと思います、視察も受け入れています。

Q. 堆肥を使っていたための工夫は？

農家に安心して使っていただけるように販売価格を1㎡当たり3千円に抑えています。堆肥づくりに用いる食品残渣(鯉節、おから、そばぬか等)を受け入れることでコストを賄う等の工夫をしています。

健康食品として「桑の加工品」を生産

東和地域は、かつて県内屈指の養蚕地帯であったが、養蚕の衰退により桑畑が荒れていた。「なんとかしてもう一度桑に輝きを取り戻したい」という想いから、当時の東和町長や町の担当職員、菅野正寿氏（特産担当理事）らが健康食品として特産品にできないかと考えていた。

ちょうどその折、神奈川県衛生研究所から「桑に血糖値を抑える成分がある」と桑の葉の多機能性についての発表があり、町は桑の葉の加工設備を東和町活性化センターに導入することにした。あわせて、桑の生産者や町内に立地している健康飲料会社等に呼びかけ、東和町桑葉生産組合を2000年3月に発足させた。活性化センターで、桑の葉を乾燥させて「桑の葉パウダー」に加工し、販売した。また、地域の特産品づくりに取り組んでいた「東和町特産振興会」に桑の葉パウダーをつかった商品づくりを呼びかけ、桑の飴や羊羹、サブレ、アイス等が次々と開発された。

2005年4月に協議会が設立されたことを受けて、これらの活動を協議会が引き継ぐこととなり、東和町桑葉生産組合は特産加工推進委員会に発展改組した。農家から買い上げた桑の葉や桑の実を加工し、ジャムや100%濃縮ドリンク等、商品を開発・販売している。2011年に新たに「桑の実リキュール」の販売を開始することから、道の駅での酒類取扱の免許をとったところである。



桑の葉や桑の実を活用した加工商品
桑の葉パウダーや桑茶、お菓子、健康ドリンク、桑の実ジャム、桑の実リキュール等、他では手に入らない商品が揃う。

遊休桑園の再生

遊休桑園には古い樹種が植わっていることから、それを伐採・抜根し、血糖値の上昇を抑える成分が多いとされる「はやてさかり」や、果実が大粒の「カタネオ」「ララベリー」等加工食品に適した品種への植え替えを進めている。

桑園の再生にあたっては、2009年度から緊急雇用対策事業を活用し、まだ、自立には至っていない新規就農者を雇用して農地の復元作業を手伝ってもらっている。「桑園の再生と新規就農者の生活の安定という一石二鳥を狙った」と理事長の大野氏は語る。協議会が土地の所有者から許可を得て桑園を再生し、再生に携わった新規就農者が再生後の畑を借り受ける仕組みとなっている。

このような取り組みによって、当初（2000年）18トンであった桑葉の生産量は2010年には約52トンと増加し、再生した桑畑も当初（2005年）は30ヘクタールに満たなかったが、2010年には約46ヘクタールを越すまでになった。

生産者は、現在桑の葉が10名、桑の実が20名である。「国内産の安全な桑の葉への需要は益々増えると思う。再生した桑畑をどのようにして次の世代へ引き継いでいくか」と菅野氏の視線はさらに先を見据えている。



桑園の再生

古い樹種を引き抜き、機能性の高い樹種に植え替える。傾斜地での重労働であり、新規就農者の若い力が頼り！

出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料



特産担当理事

すげのせいじゅ
菅野正寿 氏



米やトマト、大根などを生産する農家。もともと養蚕農家でもあったので桑畑で桑の実を生産している。

「桑には健康に良い成分が含まれています」

Q. 桑の葉や桑の実の生産で苦労されたことは？

肥料をしっかりと与えた桑の葉と、そうでない葉ではパウダーやお茶にした時に色や香りが全然異なるため、普及所の力もお借りして、剪定や施肥等の栽培方法の統一や異物混入防止等の品質管理に苦労しました。

また、農家が「来年も頑張ろう」と思える価格で桑の葉や桑の実を買い上げることも大事だと考えています。

Q. 桑の葉や桑の実にはどのような機能があるのですか？

桑の葉に含まれるDNJ(1-デオキシノジリマイシン)には、糖分の吸収を緩やかにして、血糖値の急激な上昇を抑えてくれます。また、桑の実にはアントシアニンが多く含まれていて、目によいとされています。

このような機能性をアピールして原料として桑を幅広く使っていただくために、協議会の貴重な予算(50万円)を頂いて、成分分析を行う等の努力もしています。

新規就農者の受け入れ

生産者の高齢化が進む中、次世代の担い手を確保していくために、同協議会では、定住・二地域居住者の獲得にも力を入れている。取り組みを始めて6年で、10名が東和地区に移住している。

理事長の大野氏は、これまで多くの就農希望者を受け入れ、地域への定着を支援してきた。「就農希望者が何をしたいのか、東和でそれがどこまでできるのかについてよく話し合うことが大事」と大野氏は語る。例えば、トマトをつくりたい若者には、夏場のハウスに入ってもらい実際の作業を学んでもらう。協議会として有機産直事業を行っていることから、一定の品質の農産物ができるようになれば、経験の少ない農家であっても販路

には困らず、一定の売値も確保される。

就農希望者への気配りは、農業技術面の指導だけにとどまらない。東和でやりたい農業のイメージが固まれば、それに適した農地やハウス等の施設を紹介すると共に、時には生活の拠点となる住宅(空き家)探しまで手伝う。また、新規就農者は農業が軌道にのるまでは収入が心細い。そのため、農閑期には、協議会の関連事業の手伝いや、緊急雇用対策事業等も活用し、農業以外の働き口まで面倒をみている。「使われていなかった農地やハウスが活用され、空き家に人が住むようになる。新しい人が来ることでまちが元気になる」と大野氏はその効果を語る。



就農促進パンフレット
有機農業を考えている移住者に向けて、
先輩移住者が呼びかける。

出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料



新規就農者

さいとうともこ
齊藤知子 氏



公務員の経験があったことから、東和に来た当初は協議会の事務の手伝いもされていたが、惜しまれつつ今は農業に専念する毎日。

「東和の皆さんが温かく迎えてくれました」

Q. 東和地区との出会いは？

もともとは福島市の出身です。進学・就職のため、北海道で15年ほど暮らしていました。大学で農業を学んでいたこともあり、以前から農業をしたいと考えていました。福島に戻りたくなったこともあり、就農することにしました。当初、喜多方で4ヶ月の研修を受けた後、県の農業普及センターを通じて、東和を紹介していただきました。実家に近いことと、有機農業を勉強させてもらえることが決め手となり、東和にお世話になることにしました。

Q. 研修の内容は？

2009年の夏からの半年間、大野理事長の畑で1日中一緒に仕事をさせていただく中で、様々なことを教えていただきました。実家が農家ではないので、野菜の栽培経験は全くのゼロからのスタートでした。ただし、牧場で働いた経験があったため、農村での暮らしについてはなんとなくイメージがありました。

Q. これからの夢は？

2010年の春から自分で土地を借り、トマトづくりをはじめました。徐々に種類を増やしていければと考えています。一人で続けていくことに不安はありますが、私と同じように新規就農された方と仲良くさせてもらっています。2010年3月に、新規就農された定住者の会（20名程度）もできました。協議会のみなさんにもいろいろなことで程よく巻き込んでくださるので楽しいです。



新規就農者

せきもとひろ せきなおこ
関元弘 氏、関奈央子 氏



4年前に夫婦二人で飛び込んできた関氏。単に規模や収益を求めるのではなく、地域との繋がりを大切にしながら一步一步進んでおられる。ピールづくり等、夢は広がる。

「東和の皆さんとの交流で農業のイメージが沸きました」

Q. 東和地区との出会いは？

今から10年前に偶然東和町役場を訪れる機会があり、理事長の大野さんと出会ったのがきっかけでした。夫婦共、農業の経験はありませんでしたが、以前から「農業をしたい」という気持ちがありました。おつきあいを重ねていく中で、農業のイメージが徐々に沸いてきました。

Q. 今はどのような農業をされていますか？

農業を始めたのは2004年頃からです。大野さんとの出会いから5～6年の準備期間が必要でした。仕事を辞めて、紹介していただいた借家に移り住みました。今は、有機栽培できゅうりやいんげん豆を主に作っています。有機農産物の販売会社との直接取引により、売り先や単価が決まっているので、見込みを立てやすくよかったですと思います。

Q. 地域とはどのように関わっておられますか？

集落でのおつきあいや、消防団でのおつきあい等があります。縦横に様々な繋がりがありますが、居心地良く感じています。協議会のみなさんから温かく見守っていただいているのを肌で感じます。まだまだ自分のことで精一杯ですが、将来は、他の人を見守るような生き方を見習っていきたいと思います。

ゆうきの里東和宣言

西に安達太良連峰を望み、木幡山、口太山、羽山の伏水が阿武隈川に注ぐ里山の営みが連綿と息づいてきた。

春の山菜。秋の野菜、秋のきのこに雑穀、いも類、果実、冬の漬物、味噌、納豆、餅の文化を生業として暮らしに生かしてきた。(中略)桑畑と沢田、棚田の稲穂を赤とんぼが舞うふるさとの原風景を子供たちに伝えよう。平らな土地は一坪でも耕すという先人の哲学を受け継ぎ、自然との共生と新たな技と恵みを創造しよう。心にやさしく、たくましく、生きる喜びと誇りと健康を協働の力で培おう。君の自立、ぼくの自立がふるさとの自立と輝きとなる住民主体の地域再生の里をつくらう。歴史と文化の息づく環境を守り育て、人と人、人と自然の有機的な関係と顔の見える交流を通して、地域資源循環のふるさと「ゆうきの里東和」をここに宣言する。

出典)ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料

取り組みのポイント

「ゆうきの里東和」宣言による地域再生の方向性を明確化

「ゆうきの里東和」宣言は、「皆で地域再生の方向性を共有するために、明文化したものが欲しい」ということで、13 団体が集まった頃に皆で議論を重ねながら作成された。宣言に込めた一番の想いは「なんとか自立できるまちにしたいということ」と理事長の大野氏らは語る。

この宣言には、地域再生の方向性が明確に示されており、協議会は、その宣言を具体化するための活動を展開することを目的としている。実現をめざす地域の姿(ビジョン)を明確にすることで、「やってみよう」と挑戦する気持ち(勇気)を高めると共に、各委員会が様々な事業を展開しつつも、活動の軸が同じ方向を向いているため、様々な相乗効果を生み出しやすくなっている。

東和に“あるもの”にこだわり、独自性を生み出す

中山間地である東和地域は、産業面では決して恵まれた条件にあるとはいえない地域である。そうしたなかで目を向けたのが、自然そのものを丸ごと生かすという方向性であり、少量多品種といった地域の農業特性であった。有機農業への着目の背景には、養蚕において蚕を育ててきた文化や、地域の畜産を活用した堆肥づくりがある。このように東和に“あるもの”に着目し、それに徹底し

て磨きをかけることで、他にはない東和の独自性を生み出している。

例えば、有機農業では、オーダーメイドの堆肥の開発、国内に適当な基準がないためEU基準を勉強し、硝酸態窒素の残留値の自主基準を導入(東和げんき野菜)、土壌診断の測定器具の購入、農薬適正指導アドバイザーの資格の取得等、できることを徹底して取り組んでいる。

桑の加工品では、機能性の高い樹種への改植、普及所との連携によるDNJ成分が最も多くなるような施肥や栽培、収穫ノウハウの確立、成分分析表による東和産の桑の機能性の説明等のこだわりがある。

道の駅の直売所では、「少量多品種」の農業特性を活かして、珍しい野菜や豆類等の栽培を奨励することにより、高齢の農家が競い合って様々な農産物を出荷することにより、他にない珍しさを有する売り場を構成している。また、地元産の商品しか取り扱わないこだわりがある。都市との交流に関しても、「少量多品種」を活かして、水稻の単作地帯では提供できない多種多様な体験プログラムを年間を通じて提供できるようになってきている。

このような“こだわり”を直接わかりやすく消費者に伝えることを重視することで、東和のファンを増やしていこうとしている。また、このような東和の動きに共感し、東和に移住して農業を始める若者がみられるようになっている。

「6つの委員会」方式による全員参加型のまちづくりの推進

協議会の活動範囲は広く、下の図が示すように各取組が相互に関連し、相乗効果をもたらす仕組みが構築できている。例えば、「交流定住推進委員会」の活動（就農希望者の研修、移住者への支援）を通じて東和地区で農業をはじめた就農者が、「ひと・まち環境づくり委員会」が自主基準を作成した「東和げんき野菜」を生産し、道の駅「ふくしま東和」や「ゆうき産直支援委員会」を通じて、消費者や学校給食に出荷している。また、遊休桑園の再生のために新規就農者が労働力を提供することで、桑やいちじく、えごまの生産が広がり、桑等の加工品生産の拡大につながっている。

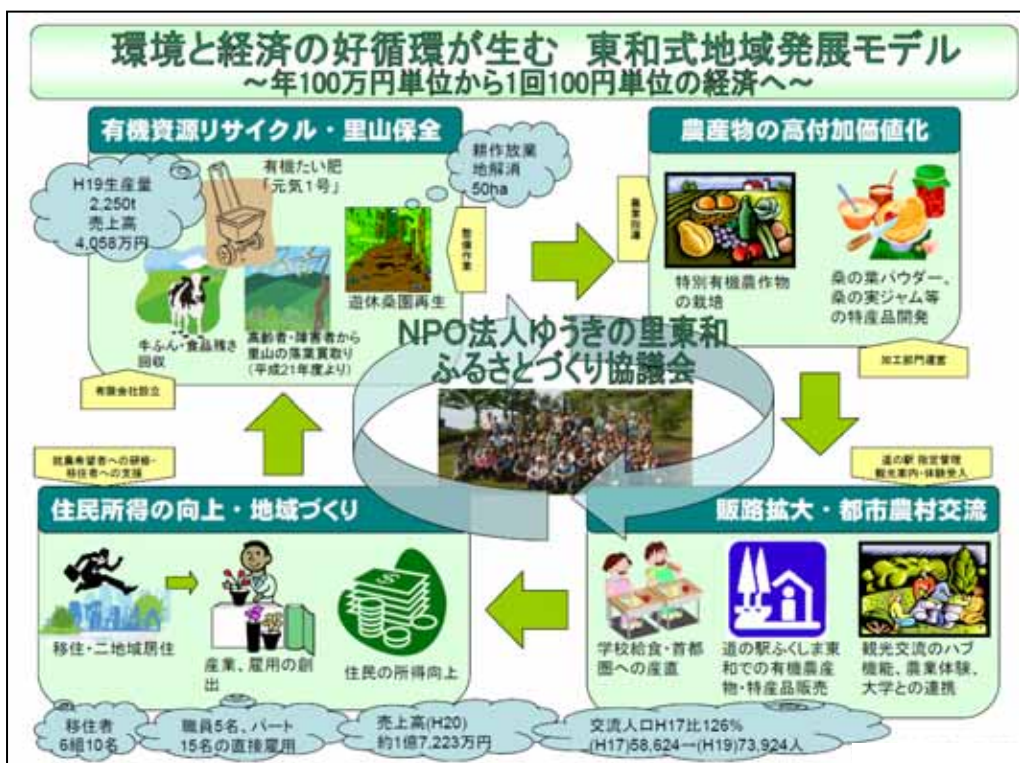
また、6つの委員会が様々な活動を企画・実施しているが、決してトップダウンで突っ走るのではなく、若い世代や女性等が積極的に意見やアイデアを出し合う等、和気あいあいとしながら活動が進められている。地域の若者や女性、高齢者等の地域の多様な人材が役割を担うことで、多様な事業を同時平行で進める推進力を得ている。また、これらの活動を通じて、人と人の有機的なつながりが広がっている。

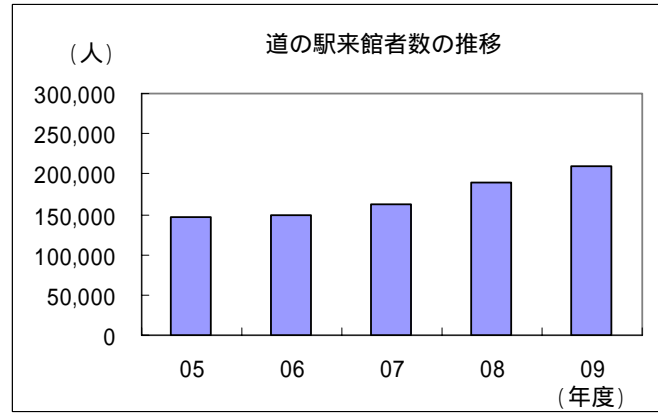
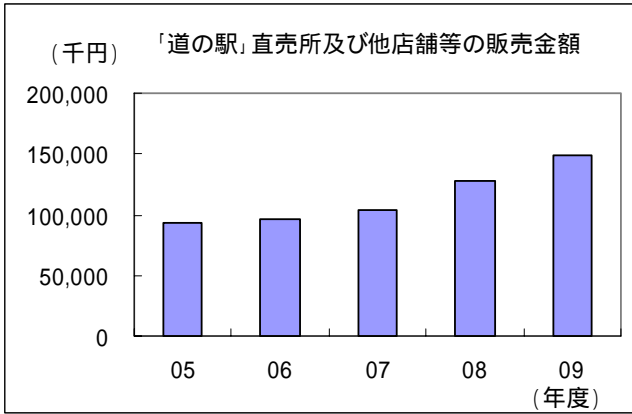
取り組みの成果

土づくりから、特産品や野菜の生産、販売までを一貫して行うと共に、「道の駅」を活動拠点として、様々な交流が広がることにより、「地域資源循環のふるさとづくり」が着々と進んでいる。


東和地域への観光入り込み客数は2009年に22万8千人にまで増加し、「東和げんき野菜」、「野菜ジェラート」等のヒット商品の誕生の効果もあり、2009年度の来館者数は約21万人となっている。「道の駅」や福島市内のスーパー等での2009年度の売上は1億2千万円に達している。消費者からの反響が大きいことから、農家の生産意欲も高まっている。また、協議会の雇用人数は2009年には20人（常勤6人、パート14人）となっている。このように協議会の活動は、地域の雇用・経済に重要な役割を果たしている。

さらに、2009年までに耕作放棄地の再生（46ha）や新規就農者の受け入れ（10人）で成果をあげていることに対して、2009年、過疎地域自立活性化優良事例として総務大臣賞と、全国農業会議所と全国農業新聞が初めて行った耕作放棄地発生防止・解消活動表彰で農林水産省農村振興局長賞を受賞している。






出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料



二本松市企画財政課
遊佐清作 氏 (左)

二本松市東和支所
嶋原正雄 氏 (右)



遊佐氏
「道の駅」の指定管理を担当。

嶋原氏
東和地区の振興を担当。

「協議会が東和の活性化を引っ張っています」

Q. 協議会とはどのような関わりがありますか？

道の駅の指定管理をさせていただいているのが一番大きなつながりです。日常のやりとりは少なく、月に1回報告をいただく程度です。観光シーズンでは問い合わせが入ると「道の駅に行ってください」と案内しています。

東京の5つの区との交流事業では、東京東和会（首都圏在住の東和地区出身者・縁故者による親睦会）の皆さんと共にお世話になっています。

また、福島県からの委託事業で地域居住の相談窓口をされており、市には定住支援の担当者がいないので、なにかあれば協議会に対応していただいています。

Q. 合併後5年が経過しましたが、東和地域の状況をどのように見ておられますか？

人口は減少していますが、これは全国的な流れなので仕方ありません。東和地域の活性化という意味ではこの会が寄与していることは大きいと思います。お年寄りにとっても、若い人が入ってきて、隣で農業を始めていろいろとつながりができると、お年寄りの生きがいになると思います。2～3年も経つと、消防団等、地域の活動にも参加してくれる等、地域の活性化につながります。

今後の展望

里山再生の日本のモデルケースへ

2009年4月に、Iターン新規就農者10人の創出や水田・里山再生に向けた「5ヵ年計画」を始動させた。東和地域でも里山が荒れたため、鳥獣害の被害が出ている。広葉樹林の落ち葉等を集めて堆肥化する等のアイデアはあるが、事業として長続きするための収益モデルの姿はまだみえていない。「きれいになった里山で、グリーンツーリズムで訪れた人が遊んでくれれば」と理事長の大野氏らは夢を語る。里山再生の日本のモデルケースを目指して挑戦は続く。

東和げんき野菜の生産者の拡大

2009年5月から販売を開始した東和げんき野菜は大変好評で、需要に対して供給が追いついていない状況である。生産者を増やしていくため、生産者会議でビニールハウス設置の補助金の説明会を開いたり、道の駅の店長自らが畑を回り、生産を呼びかけていこうとしている。

桑加工等の収益事業の自立

桑加工事業では、事業規模の拡大に伴って、桑の葉や桑の実の買取のための運転資金の負担が大きくなっている。また、道の駅に設置している加工施設では処理能力不足するため、県外の業者に委託している桑加工（桑茶の製造、粉末加工）を自前で行うための設備投資についても検討が

始まっている。協議会事業における、ゆうき産直事業を含めた収益事業の位置づけを再検討し、別法人化等を進めていくことが検討課題となっている。

都市との交流の拡大

東和地域のファンを育てていくためにも、都市の消費者との直接交流は重要な取り組みである。グリーンツーリズムの取り組みは、まだ旧東和町であった頃の1995年の国体開催の折に、民泊で選手・関係者を受け入れたことにさかのぼる。グリーンツーリズム推進協議会を立ち上げ、様々な取り組みを重ねてきているが、近年は中学生や高校生の農業体験に力点を置いており、2009年度は170人を受け入れた。少量多品種の特性を活かし、秋であればりんご採りやきのこの収穫体験等、年間を通じたプログラムが100種類ほど出来上がっている。これらの交流事業は、農家の農業収入を補うと共に、子どもとの交流を通じた農家の誇りの再認識や、意欲（モチベーション）の向上に繋がっている。農家体験の需要は益々拡大すると見ていることから、簡易宿所としての許可を得た民宿施設の確保が課題となっている。

このように、協議会は、里山の恵みと人の輝くふるさとづくりを進めていくため、先を見据えた課題を設定しながら、取り組みの輪を広げながら、一步一步着実に取り組みを進めていっている。



東京の5つの区との交流事業
東和産「げんき野菜」の販売を通じた交流。販売には東京在住の東和出身者も毎年応援に駆けつけている。
出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料



子どもとの交流
首都圏中学生の農業体験を受け入れて自然豊かな東和をPR。地元農家も若者との交流で元気倍増。
出典) ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会資料



副理事長

むとういちお
武藤一夫 氏



なめこの栽培と農家レストランを経営している。協議会の設立前から取り組みに参加。「つどいあい」(直売所出荷者の会)にも関わっていた。

「都市との交流を広げて行きたい」

Q.これまで取り組んでこられた感想は？

東和地域にはこれといったものがないので、バランスよく小さな取り組みを積み重ねていくしかありません。これ1本で食べていけるというものがあればよいのですが、合わせ技しかないのです。理事のうち6人には後継者がいます。親が忙しくても楽しそうにしていれば、後継者もやってみようという気になるのではないのでしょうか。

Q.都市と農村との交流のこれからの方向性は？

農産物に付加価値を付け、知ってもらうという通り一遍の活動では不十分であり、東和のファンになっていただける消費者との交流が重要です。

C S A (Community Supported Agriculture)という言葉をご存知ですか？直訳すると「地域で支える農業」という意味ですが、最近、消費者や販売者等が生産者と連携したり、食糧生産に関わるような動きが見られるようになってきています。外国から様々な農産物が入って来る中で、国産の価値を認める消費者としっかりと繋がっていきたいと考えています。